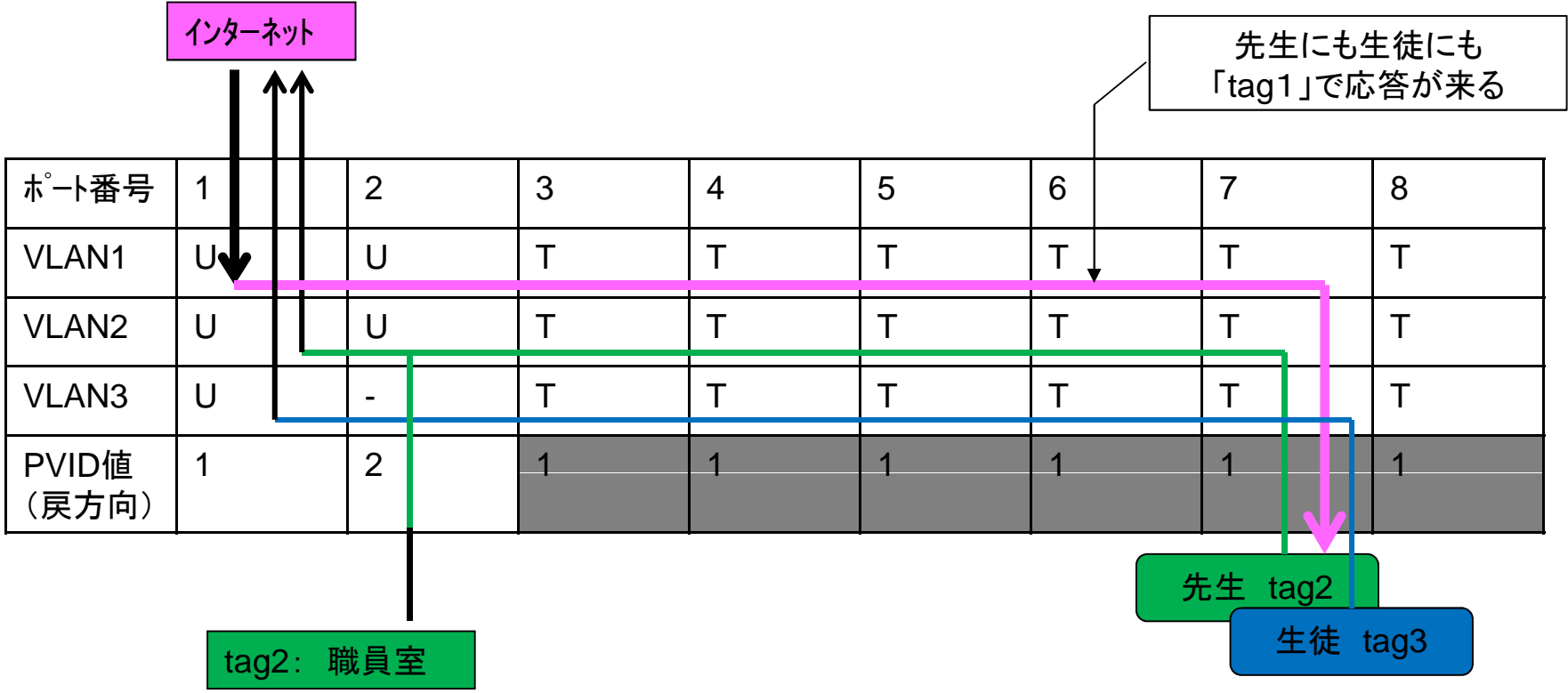
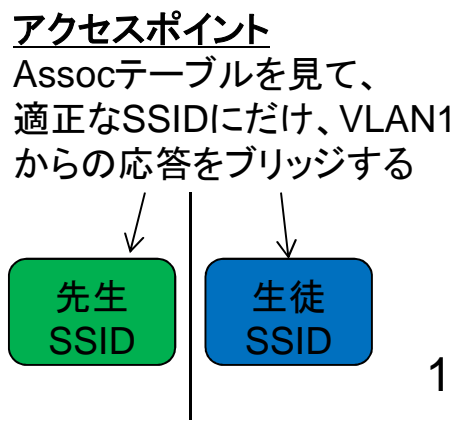


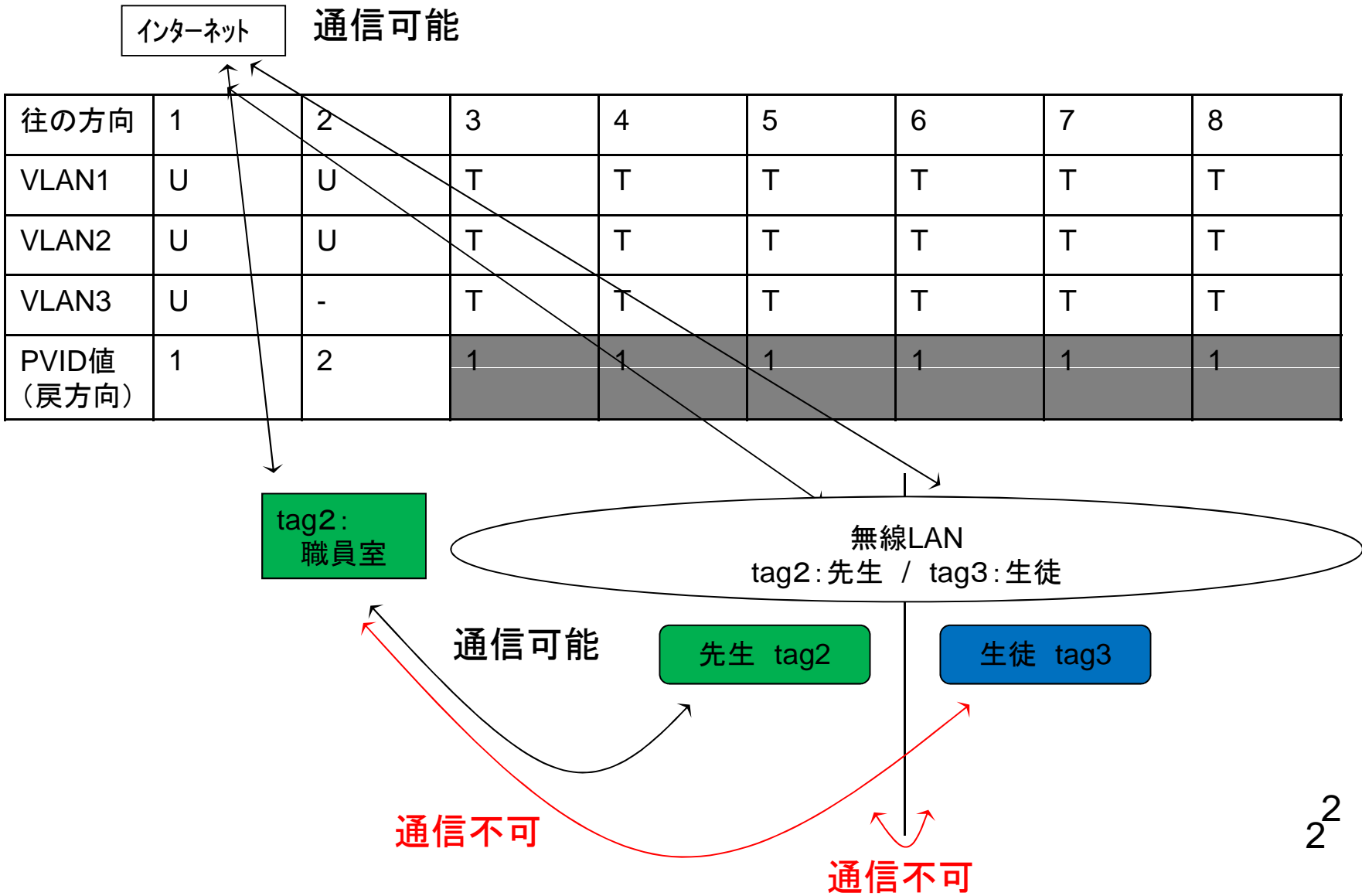
お客様の問い合わせ：八雲町役場 にわかSE奮闘記録 について



黒線 : VLAN1 (untag)
 ピンク : VLAN1 (tag)
 緑 : VLAN2 (tag)
 青 : VLAN3 (tag)



お客様の問い合わせ：八雲町役場 にわかSE奮闘記録 について



無線APの設定（点線:追加VLAN）

無線基本 (11g)

無線機能: 11gの無線機能を有効にする(11aの無線機能は無効になります)

無線モード: 11b/g/n

有効 SSID#: 2

#	SSID	VLANモード	VLAN ID	追加VLAN ID
1	sensei-g	Multiple	2	1
2	seito-g	Multiple	3	1

オートチャンネル: 有効 無効

チャンネル: Ch 1 - 11

チャンネル変更間隔: 30分

子機接続中でもチャンネルを変更する

チャンネルモード: 20 MHz

BSS BasicRateSet: 1,2,5,11 Mbps

設定 キャンセル

解説:何故通信が出来たか？

●解説

今回の構成の場合、ポート3～8のインターネット通信に対する戻りはルータ収容のポートから入ります。ルータからはuntagフレームが入るので、ポート1のPVIDであるVID=1のtagが付与され、VLAN1のメンバポート(全ポート)に対して吐き出されます。

AP接続のポート3～8はVLAN1について Taggedポートであるから、VID=1のタグを付与したまま送出されます。

※PVID(Permanent VLAN ID)はこの場合ポート1だけです。

無線アクセスポイントは、VLAN2と3それぞれに、追加VLAN1というものが設定されているため、VID=1のタグを付与されたパケットは、有線インターフェースから全て、無線インターフェースへ渡されます。

それを受け取った無線インターフェースは、接続されているassoc情報を見ながら、関係するパケットだけをつまみだして、関係するSSIDに対してのみ伝送します。(※)関係ない通信パケットは破棄します。

※つまり、有線からきたものを何でも無線へ流しているわけではありません。

構成上のリスク

●構成リスク

BSL-PS-G2108MIはHUBの仕様がIVLです。

その特徴は、VLAN単位でMacアドレスを学習し、パケットをブリッジします。

つまり、PVID1で戻ってきた場合のVLAN1には、宛先のMacアドレスが学習されていないから、宛先不明ユニキャストパケットとしてVLAN1が設定されたポート全てに対してフラッティングいたします。

つまり、今回の構成の場合、アクセスポイントへの有線帯域で通信負荷が高くなることに注意を払う必要があります。

使用パターンが限定される範囲であれば影響は無いと思いますが、それが影響した場合は、SVL仕様のL2スイッチに変更してみることをお勧めします。

加えて、アクセスポイントの無線セキュリティの設定で、「STAセパレーター」「SSIDセパレーター」を設定しておくことをお勧めします。